

【質問】

日本では明治5年まで太陰太陽暦が使われてきました。これは月の満ち欠けを基にしているため庶民にも日付が分かりやすく、夜は月明りを利用するのが便利だったからと言われてます。また暦が実際の朔望からずれないようにするため日月食の観測に励み、そのため精密な暦算天文学が進歩したと言われてます。それなのにヨーロッパでは夜の暗い中世にも太陽暦(ユリウス暦)が用いられ、近世に入ると宇宙そのものを研究する天文学が暦学を経由することなしに発展したのはなぜでしょう。なお適当な参考文献がありましたらお教え下さい。

佐藤明達(東京都)

【回答】

まず、ご質問の前提になっている佐藤さんの御説は、暦に関する通常理解とはだいぶ違っているように思われます。佐藤説のような考え方も可能かも知れませんが、ここでは普通に受け入れられている暦の発達史に沿って述べます。

暦の主たる目的は、事件の記録や行事の計画のために日を数えることです。日を数えるために、周期的な天体現象が利用されました。月の満ち欠けの周期は季節変化の周期よりずっと短いので古代の人々にも認識されやすく、どこでも初めに太陰暦が生まれその後太陽の周期変化も加味した太陰太陽暦に進化したと考えられます。エジプト暦は太陽暦から始まったようですが、1年を12ヶ月に分けていることから判断すると、それ以前に太陰暦の時代があったと見るのが妥当です。このように古代中国、バビロニアなどの専制君主国家でも古くから太陰太陽暦が採用されましたが、その理由は御説のように「庶民にも日付が分かりやすく、夜は月明りを利用するのが便利だった」からではありません。古代専制国家にあっては、暦は人民を支配するための非常に重要な道具の1つだった訳で、庶民生活の都合を聞いて暦を決めたなどと言うことはあり得ません。中国の文化を継承しただけの日本でも事情は同じでしたし、暦の内容、出版を国家が統制しているという意味では、現在でも状況が余り変わってはいません。

太陰暦からは1日が新月、15日が満月とすぐ分るので便利な点も確かにあったでしょう。しかし、この程度の

便利さは太陰太陽暦の深刻な不便さに比べたらまったく問題になりません。毎年の暦に24節気という季節の目印を付けないと農業や漁業の計画も立てられないし、おまけに2-3年に1回は1年が13ヶ月になるのです。江戸時代の武士は年俸で暮らしていましたから、閏月のある年はさぞヤリクリに苦労したことでしょうし、幕府も財政計画を立て難かったに違いありません。実際、明治5年の太陽暦改暦は、翌年が閏月を含むことが判り役人に13ヶ月分の月給を払わねばならず、国家財政逼迫の折から大隈重信らは強引に太陽暦に改めたのでした。このように太陽暦への移行は社会生活に不便な太陰太陽暦からの解放という大きな歴史的意義があった訳ですが、今でも秋春分のころになると時々大新聞の論説にさえ、旧暦(太陰太陽暦の俗称)の良さを見直そうとか、甚だしい場合は旧暦を復活させようといった主張がなされるのは実に愚かしく残念なことです。月齢を知りたいければ月齢を記したカレンダーを買えば良いのです。

西欧ではローマ時代にユリウス暦を採用する以前から暦学と天文学は分離し、日月、惑星の運動は天文学の範疇で研究されて来ました。また、ギリシャで生まれた幾何学的な物の見方は天体運動の本質を理解する上で極めて強力な武器でありました。これに対して、日月食観測などから暦の精度向上を目指した中国、日本の暦算天文学は代数的なパラメータ合わせに終始して、惑星運動の本質はなんら理解されないままに留まったのでした。それゆえ、高橋至時や渋川景佑といった後世の天文方は、ラランド天文書から西洋天文学の成果を導入せざるを得なかったのです。従って、御説のように、「そのため精密な暦算天文学が進歩した」とは到底言えませんし「ヨーロッパでは夜の暗い中世にも太陽暦が用いられ(この部分何のことか意味不明)……天文学が暦学を経由することなしに発展した」と言うのも両者は昔から別だったのですから不思議でもなんでもないので。中国で近代科学が生まれなかった最大の理由は、唐代にインド天文学が中国に輸入された時は三角関数を学ぶ良いチャンスだった筈ですし、イスラム天文学や西洋天文学の流入からも学べた筈ですが、彼らはそれらをほとんど無視したのでした。中華思想に裏打ちされた官僚的体質にあったように私には思われます。

なお、福沢諭吉の「改暦弁」や大隈重信の「回顧談」等をご参照下さい。 中村 士(国立天文台)

編集委員 谷川清隆(編集長)、坂尾太郎、田代 信、中川貴雄、中村 士、濱部 勝、林 左絵子、半田利弘
 平成6年8月20日 発行人 〒181 東京都三鷹市大沢2-21-1国立天文台内 社団法人 日本天文学会
 印刷発行 印刷所 〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町565-12 啓文堂 松本印刷
 定価700円(本体680円) 発行所 〒181 東京都三鷹市大沢2-21-1国立天文台内 社団法人 日本天文学会
 電話 (0422)31-1359 (FAX自動切換) 振替口座 東京 6-13595